

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

郷土教育 第2号

—高・特別支援学校対象—

平成23年4月発行

郷土素材を活用し、世界史と関連付けて 考えさせる日本史の授業の工夫

平成18年12月に公布・施行された教育基本法では、「教育の目標」の一つに、次の条項が示された。

伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。（第二条 五）

また、国の教育振興基本計画（平成20年7月）を踏まえて定めた鹿児島県教育振興基本計画（平成21年2月）においても、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養い、これからの社会づくりに貢献できる人間」の育成を基本目標の一つに掲げ、今後5年間に取り組む施策の一つとして「郷土の教育的な伝統や風土の活用」を挙げている。

そこで本稿では、郷土素材を活用し、世界史と関連付けて考えさせる日本史の授業の工夫について述べる。

1 新学習指導要領における郷土教育の位置付け

小学校の社会科では、第3、4学年でまず学校の周りを探検したり地図にまとめたりすることから学習し、発達の段階に応じ

て市町村や県の様子について学んでいく。中学校の社会科でも「身近な地域を調べる活動」を取り入れながら地理や歴史を学んでいく。

ところが、高等学校の地理歴史科では、身近な地域からかけ離れた日本や世界の地理や歴史から学習を始めることが多い。そのため、地理歴史科を「自分の生活と密接に関連する教科」という意識が薄い生徒も見受けられる。

そこで、高等学校の地理歴史科においても積極的に郷土素材を教材化し、授業に取り入れることが大切である。歴史では、郷土の先人や歴史的事象を日本史や世界史の学習活動の中に適切に位置付けて考えさせるなどの指導が、ひいては「我が国と郷土を愛し他国を尊重する態度を養うこと」につながるのである。

こうした地域社会の歴史や文化を取り扱う指導については、平成21年3月に公示された「高等学校学習指導要領」（以下「新学習指導要領」）の地理歴史科の日本史Bでは、次のように示されている。

地域社会の歴史と文化について扱うようにするとともに、祖先が地域社会の向上と

文化の創造や発展に努力したことを具体的に理解させ、それらを尊重する態度を育てるようにすること。(内容の取扱い(1)オ)

今回の改訂では、日本史を総合的に考察する観点から地域社会の歴史と文化をとらえさせることとしており、地域社会の歴史を我が国全体の歴史と結び付けて指導することが重要である。

なお、実際の指導においては、県史や市町村史など各種資料の活用や、博物館・資料館の利用や文化遺産の活用など、様々な学習方法の工夫が大切である。

2 日本史と世界史の関連付けについて

「新学習指導要領」における日本史Bの目標は、次のように設定された。

我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ、我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。(波線は筆者による。以下同じ。)

また、内容の取扱いの(1)アにおいても、「我が国の歴史と文化について各時代の国際環境や地理的条件などと関連付け、世界の中の日本という視点から考察させること」としている。

一方、世界史Bについても、目標が「世界の歴史の大きな枠組みと展開を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、(後略)」と設定され、内容(1)イでも、「日本と世界の諸地域の接・交流について(中略)適切な事例を取り

上げて考察させ、日本の歴史と世界の歴史のつながりに気付かせる。」としている。

すなわち、地域の歴史的素材を取り入れながらも、世界史的な視点で日本史をとらえさせていくことが大切である。

3 日本史における鹿児島の郷土史

鹿児島は、政治の中心地であった奈良、京都、そして江戸(東京)から見ると辺境に位置していることもあり、日本史の教科書における鹿児島の記述はごくわずかである。しかし、アジアや世界にまで視野を広げてみると、南九州は「南に開けた日本の玄関口」であることが分かる。大陸までの距離は、東京よりも遙かに近く、古代より南西諸島を経てアジア諸国と結び付く「海の道」も存在していた。

大航海時代においても、ヨーロッパで作成された地図(メルカトル・アジア図)に“cangoxuma(鹿児島)”という表記が見られることから、鹿児島が日本の玄関口の一つとして認識されていたことが分かる。



「メルカトル・アジア図」神戸市立博物館蔵

そのため、鹿児島は「鑑真和上の上陸」、「鉄砲の伝来」、「ザビエルの来日」をはじめ

めとする日本外交史における重要な出来事の舞台となった。

例えば、江戸時代に限っても、幕府の対外政策と深いかわりをもつ鹿児島県の歴史的事象を列挙すると、次のとおりである。

- ・ 島津家久による朱印船貿易派遣(1604～35)
- ・ 薩摩藩の琉球侵攻とその後の支配(1609～)
- ・ 宣教師シドッチの屋久島潜入事件(1708)
- ・ 唐通事、朝鮮通事存在と藩密貿易
- ・ 宝島事件(1824)とモリソン号事件(1837)
- ・ 琉球への外国船来航事件(1843～)
- ・ 生麦事件(1862)と薩英戦争(1863)
- ・ 開成所設置(1864)と英国留学生派遣(1865)
- ・ パリ万博参加(1867)とベルギー商社設立計画

三方を海に囲まれ広大な海域をもち、さらに琉球王国を支配していた薩摩藩は、鎖国体制下においても、対外関係という点で

極めて重要な役割を担っており、そのことは欧米列強による外圧の危機に直面する幕末期においては特に顕著になっていく。

4 郷土素材を活用し、世界史的視点から歴史を考えさせる日本史の授業の工夫

日本史の授業で、幕末期の鹿児島県の郷土素材を教材化するとしたら、西郷隆盛、大久保利通、そして島津斉彬が挙げられるであろう。しかし、彼らの業績にしても、単なる郷土史として扱うのではなく、世界史の大きな流れの中でとらえることにより、その意味・意義がより明らかになる。

ここでは、日本史Bの小単元「列強の接近」において、鹿児島県の歴史的郷土素材を生かし、世界史と関連付けて考えさせる日本史の授業の展開例を紹介する。

- 単元名 幕府の衰退 「列強の接近」 (1/6)
- 本時の目標 (1) 国際情勢の変化を踏まえ、世界史的な視点で欧米列強の接近の目的と影響を考察する。
(2) 諸資料を基に、ロシア及びイギリスの接近と幕府や各藩の対応について読み取る。
(3) 相次ぐ欧米列強の接近の結果、幕府の対外政策が大きく変化していったことを理解する。

○ 本時の展開

過程	時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点 (下線:世界史, ゴシック:郷土史)
課題把握	5分	○ 本時の学習の確認 欧米列強の接近に対し、幕府の対外政策はどのように変化していったか。	○ イギリスでは市民革命や産業革命、フランスではフランス革命が起こり、ロシアはシベリアに進出し、アメリカは西部開拓を進めて太平洋に進出するなどの国際情勢の変化を世界地図で確認する。	○ 17～18世紀の世界の大きな変化の背景を踏まえ、「世界史の中の日本」という視点で欧米列強の日本接近を考察することが大切であることを理解させる。
課題追究	10分	○ ロシアの南下による緊張と、幕府の対応 ・ ラクスマンの根室来航(1792) ・ レザノフの長崎来航(1804) ・ 幕府の蝦夷地直轄地化(1807) ・ 間宮林蔵の北方探検(1808)	○ 当時の国際情勢を踏まえ、なぜ、ロシアがこの時期に日本へ接近してきたのかを、考察する。 ○ ロシアの南下による各地での衝突と幕府の対応について確認し、その後ゴローニン事件(1813)を経て、対露関係の緊張が緩和したことについて調べる。	○ 英仏のヨーロッパにおけるロシア南下阻止政策と、それに伴う不凍港の確保が背景にあることを確認させる。 ○ これまでの北方探検の経緯を地図で整理させる。 ・ 最上徳内の千島探索(1786) ・ 近藤重蔵らの「大日本恵登呂府(エトロフ)」の標柱建立(1798) ・ 間宮林蔵の間宮海峡発見(1809)

課題追究	15分	<ul style="list-style-type: none"> ○ イギリスの日本接近と幕府の対外政策の転換 <ul style="list-style-type: none"> ・ 薪水給与令（文化の撫恤令）(1806) ・ フェートン号事件(1808) ・ 宝島事件(1824) ・ 異国船(無二念)打払令(1825) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ イギリスの捕鯨船が宝島に來航した理由を考える。 ○ 「宝島事件絵巻」を基に、宝島事件の概要と薩摩藩の対応について読み取る。  <p>「宝島事件絵巻(部分)」黎明館蔵</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ <u>産業革命に伴う機械の潤滑油を鯨油からとることを目的とした捕鯨活動のための來航であったことを考察させる。</u> ○ 薩摩藩は文化の撫恤令に基づき対応したが、銃撃戦となり死者が出たことを資料から読み取らせる。 ○ 宝島事件を始めとするイギリス船の相次ぐ來航と、各地で起こったトラブルをきっかけに、幕府は異国船打払令を出し対外政策を強硬策に転換していったことを理解させる。
	15分	<ul style="list-style-type: none"> ○ アメリカ商船モリソン号の來航、アヘン戦争の情報による幕府外交の転換 <ul style="list-style-type: none"> ・ モリソン号の來航と撃退(1837) ・ 蛮社の獄(尚齒会の渡辺崋山、高野長英等の処罰)(1839) ・ アヘン戦争(1840～1842) ・ 薪水給与令(1842) ・ 琉球への外国船來航事件(1843～) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「モリソン号隨行記」を基に薩摩藩の対応を読み取る。  <p>「モリソン号隨行記」 横浜開港資料館蔵</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ なぜ、渡辺崋山や高野長英は幕府の鎖国政策を批判したのかを考察する。 ○ なぜ、相次いで琉球に外国船が來航したのかを考え、薩摩藩の対応について確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ モリソン号の來航に対し、幕府は異国船打払令により浦賀で撃退し、薩摩藩は山川に上陸させ応接した後、異国船打払令に基づき撃退したことを確認させる。 ○ 鎖国下においても、海外情報の入手ルートや、蘭学者のネットワークが存在したことを紹介する。 ○ 琉球は薩摩藩の支配下にあると同時に、「琉球王国」として中国に朝貢を行う独立国であったことを踏まえて考えさせる。 ○ 島津齊彬は、琉球外国船來航事件を国家の一大危機ととらえ、列強の軍事力に対抗するため、集館事業を始めたことを紹介する。
	5分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時のまとめ <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>幕府は欧米列強とのトラブルを避けるために、一度は強硬策を採るが、列強の軍事力を認識し再び懐柔策に戻った。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 従来の撫恤令からフェートン号事件や宝島事件の影響で異国船打払令が出され、その後アヘン戦争の情報なども得て、薪水給与令が出されたことを確認する。 ○ この後、アメリカの日本に対する関心が急激に高まってきたという見通しをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 鎖国体制下であっても、<u>世界史の大きな流れの中で日本史を考える必要があることと、鹿児島が対外的に極めて重要な位置にあったことを確認させる。</u> ○ 開国後も、生麦事件、薩英戦争、英国留學生の派遣など、薩摩藩は対外関係において重要な役割を果たしていくことを予告する。

今回は、幕末期の対外関係史を取り上げたが、鹿児島は原始・古代から近現代に至るまで郷土素材の宝庫であり、隠れた歴史や偉人たちも多く存在する。

高等学校の地理歴史科においては、これまでも郷土教材の教材化が図られ、多くの実践の蓄積がなされてきた。こうした成果を踏ま

えつつ、平成25年度からの「新学習指導要領」導入に向けて、今後更なる工夫・改善が望まれる。

〔参考文献〕

○ 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』平成22年6月

(教科教育研修課)